

回数	年	受賞者・受賞概要
第 55 回	2020 年 9 月	<p>子供歌舞伎 振付（監督） 北野勝彦氏</p> <p>石川県小松市で毎年 5 月に開催される「全国子供歌舞伎フェスティバル in 小松」は、地元の祭礼「お旅まつり」にあわせて実施される子供歌舞伎である。全国で実施されている子供歌舞伎を二座招待し、地元の子供歌舞伎勸進帳実行委員会による「勸進帳」と共に上演。もともと小松市には、お祭りの曳山（山車）で子供が歌舞伎を演じる「曳山子供歌舞伎」という行事が江戸時代からの伝統として続いており、さらに小松市は歌舞伎「勸進帳」の舞台である「安宅の関」もあることから、歌舞伎とは縁が深い場所である。歌舞伎の街・小松市を全国に発信すべく、平成 11 年からこの「全国子供歌舞伎フェスティバル in 小松」を毎年開催。</p> <p>北野勝彦氏は小松市の子供達が演じる「勸進帳」の振付（監督のこと）を第 1 回から第 16 回（平成 27 年）まで務められ、「全国子供歌舞伎フェスティバル in 小松」ではいわば裏方として、子供達を指導。貴重な存在である。現在は、平成 27 年に曳山 250 年本祭を迎えた「お旅まつり・曳山子供歌舞伎」において西町を中心に振付の指導をされている。</p>
第 54 回	2018 年 9 月	<p>学校法人御船学園 平成音楽大学</p> <p>九州唯一の音楽大学として根を張り、地元や日本各地に残る伝統音楽文化を継承しながら音楽のチカラを伝え続けている。熊本地震でキャンパスにも数々の貴重な楽器にも多大な被害が出たにも関わらず、学生が音楽芸術を通じ、学内外の復興を鼓舞するような活躍をした。そのため多くの応援や支持も得て現在の学園復興をスムーズにしている。また、学園には音楽の心を持つ幼児教育者を育成するため「子ども学科」も設置されている。長年、音楽を通して貢献されてこられた役目は大いに評価される。</p>
第 53 回	2017 年 9 月	<p>有福子供神楽社中</p> <p>300 年もの古くから伝わる「有福神楽」の保存と継承を目的として、社中を復活。現在、12 人の子ども達が毎週多数の指導者のもと、舞の収得に励んでいる。</p> <p>主な演目は出雲神話を基にした代表作「大蛇」をはじめ、7 演目にのぼり、祭り、奉納時には地元民に披露している。</p> <p>又、神楽の保存、形、技術の収得のみでなく、伝統芸能に触れることで歴史や心、礼儀作法も教え、心豊かな地域社会のリーダー育成に務めている。</p> <p>大尾谷子供神楽社中</p> <p>石見神楽の継承を願い、子ども達で団を作り、伝統芸能を次世代に忠実に残す目的で、舞、奏楽の基本を徹底指導。神楽の「心」である、礼に始まり礼に終わるとの教えを大切に、神楽と共に子ども達が将来社会に役に立つ人間形成を目的として指導中。</p> <p>主な演目は 5 演目で、年 20 回以上の公演。2015 年福井県での交流祭、2016 年金沢市での「大蛇」の上演は参加者から絶賛された。</p>

回数	年	受賞者・受賞概要
第 52 回	2016 年 9 月	西宮少年少女合唱団団長 中西 覚氏 1961 年西宮市で誕生した少年少女向けの西宮少年合唱団を設立以来、団長として健全な少年少女の音楽精神文化の発展に貢献。現在小学 4 年生から高校 2 年生まだが所属する合唱団は、これまで市音楽特別賞をはじめ日本各地でさまざまな賞を受賞。海外でも高い評価を受けている。 作曲家としても管弦楽などの作品展 6 回のほか、数多くの作品発表会やコンサート、また兵庫県民創作オペラ「おさん茂兵衛丹波歌暦」などオペラも 9 作品作られている。多くの少年少女に、音楽を通じて人としてあるべき方向へ導き、感動を与えてきた。
		小鹿野歌舞伎保存会（小鹿野子ども歌舞伎） 小鹿野歌舞伎は江戸時代後期に初代坂東彦五郎が江戸歌舞伎をこの地に伝えたのが始まりとされ、旧大和座の系譜をひく地芝居である。小鹿野歌舞伎保存会は組織のうちのひとつが「小鹿野子ども歌舞伎」である。毎年、3 月、4 月、11 月に公演をしており、常設の掛け舞台のほか、祭り屋台（山車）に芸座・花道を張り出して演じる「屋台歌舞伎」も行われる。近年、長浜曳山子ども歌舞伎（滋賀県）、小松曳山子ども歌舞伎（石川県）と並んで、「日本三大曳山子ども歌舞伎」と称されている。
第 51 回	2015 年 9 月	小針領家獅子舞保存会 埼玉県指定無形民俗文化財に指定。春から秋にかけての神社の祭礼では、天下泰平、五穀豊穡、悪病退散を祈願する獅子舞が広く奉納されている。 桶川市の小針領家の獅子舞は 4 月と 9 月に行われる氷川諏訪神社の祭礼で奉納されるものである。獅子舞の前に、舞の場を清めるため子どもたちによる棒使いの演技が奉納されるのが特徴で、若者が舞う「草神楽」と熟練者が舞う「正神楽」とともに子どもの獅子舞が披露される。子ども達は保存会員として登録されており、保存会は「引きこもりがちな」子どもに参加を呼びかけるなど、地域教育の実も上げている。
		研ぎ師 森本 光一氏 「堺打刃物」と呼ばれる包丁は、その切れ味の良さから全国の料理人の包丁は 90%以上が堺打刃物と云われるくらい国内外で圧倒的な支持を得ている。 森本光一氏は半世紀以上に亘り、堺打刃物における刃付（研ぎ）部門に従事。その間本霞研ぎの技術・技法の習得向上に努め、今やその卓越した凄腕技術は「現代の名工」として厚生労働大臣賞を受けるほどに名人の域に達している。長年の経験に培われた熟練した高度な技術によって業界内外より非常に高い評価を得ている。 通産大臣（昭和 63 年当時）認定の伝統工芸士とし、堺打刃物は勿論のこと広く他の伝統工芸の伝承、発展向上にも意欲的に取り組んでいる。伝統工芸フェスタ「凄腕職人街」の企画・立案にも発足当初（4 人）から参画。全国各地より 18 人の名だたる伝統工芸士が出展するほどに人気を博している。
第 50 回	2014 年 9 月	

回数	年	受賞者・受賞概要
第 49 回	2013 年 9 月	<p>日本舞踊市山流家元 市山 七十世氏</p> <p>日本舞踊・市山流の宗家である7代目市山七十世（いちやま なそよ）は、子供達を含めた多くの人々に日本舞踊の指導を行うとともに、平成19年には、「新潟下駄総踊り」の振り付けを手がけ、その新しい踊りの中へ日本舞踊伝統の振りを取り入れた。新潟下駄総踊りは、毎年9月に開催される「にいがた総おどり」の中の一大イベントであり、樽砧（たるきぬた）に太鼓、三味線のリズムに合わせ、足元には小足駄（こあしだ）を履き、インドの民族衣装サリーの古布から仕立てた着物を身にまとった、全く新しい踊りである。小足駄を作る地元職人の技を守りながら、古くから伝わる歴史に新しい命を吹き込み、新潟の魅力あふれる一大イベントへと成長し続けている。</p>
第 48 回	2012 年 9 月	<p>制竿師 城 純一氏</p> <p>昭和12年に製竿師「源竿師（げんかんし）」に入門。へら竿づくりの道に入り、昭和21年に独立。「魚集（ぎょしゅう）」を名乗る。その後、独自の技術による良質な竿の開発と後進の指導に尽力。技術的には火入れの工程に「強火焼き入れ工法」を取り入れ、竹のしなやかさと強度という相反する特性をともに高めることに成功。グリップに籐（とう）のツルを巻き付けて漆を塗り重ねる「渦巻き握り」を考案するなど意匠にも工夫を凝らし、紀州へら竿を全国的なブランドとして高めた。へらブナ釣りは明治初期、琵琶湖のへらブナをため池などに移入して始められ、竿にする素材として和歌山県北東部に多く自生する「高野竹」が最も適していたことから、和歌山県橋本市付近で製造が盛んとなった。近年は城氏のもとに韓国や台湾、中国などからの注文も相次ぎ、世界的な名品として注目されている。</p>
第 47 回	2011 年 9 月	<p>上総鋏 金工職人 大野 正敏氏</p> <p>上総（かずさ）鋏（ばさみ）の4代目として、立野平作の技法と伝統を受け継ぐ。昭和59年に千葉県より伝統的工芸品として指定され、翌60年にはその高い技術が評価され千葉県の卓越技能章（現代の名工）を受章。きめ細かな仕上げをほどこした作品は切れ味、使い易さ、耐久性など実用品としての高い機能性に加え、手づくりならではのぬくもりと美しさを兼ね備えている。</p> <p>立野平作の流れを汲み、上総鋏のふるさと・市原市で鋸音を響かせる大野氏の作品づくりは、伝統工芸の保持発展にとどまらず地場産業の振興という点でも大きく貢献している。</p>
第 46 回	2010 年 9 月	<p>華道家 池坊 美佳氏</p> <p>国内外で華道の普及振興の為に尽力。日本の伝統文化を考える「エンジン01文化戦略会議」への参加や、「いけばな」「伝統」「和」をテーマに、「もったいないプロジェクト」を始動。わかりやすく親しみやすい華道の普及、「和文化」「精神生活」「節約」などエコ思想の普及に務め、伝統工芸品を使用した新しい文化の創造や、子供たちへの和文化の伝承にも尽力。京都文化や伝統産業情報の発信拠点である「京都館」館長として伝統産業の振興や伝統文化の普及に著しい功績を残している。</p>